

私の半生 出生―軍隊入隊―抑留

三重県 服部 利男

一 出生

私の生まれた日は大正七（一九一八）年三月三十日となっているが、母の言葉によると三月二十八日午前八時過ぎが本当で届け出た日が二日遅れの三月三十日となったため、生涯三月三十日が私の誕生日として戸籍に記載されることになった。

私の家には家系図というようなものはなく、先祖代々言い伝えてきた口碑的なものが家系図の代わりをしている。

私の家のことを町の皆さんは鳥池（とりけ）と言う。昔からの屋号だと思うが語源がはっきりしない。祖父から聞いた話だとその昔、家の前は鳥池谷という深い谷で、其の谷の際に出来た新家だから、鳥池と言うようになったらうとのことだが。

私の家の墓石には元禄年間没との記載がある。で。新家といっても三百余年も前のことであり、現在は埋立てられて、住宅が建ち並んでいる。

このような現状では、祖父の言葉も口碑的なもので真偽は定かではない。私の名前も利男と書いて「としお」とつけてもらったが、父利郎「としお」と同じ発音になるので、家では「よしお」と呼ばれていた。また町の人たちからもみんな「よしおさん」と呼んでもらって、九十年たった今でも町内では「よしお」さんで通用している。私は父「利郎」、母「はしの」の長男として生まれ、姉一人、弟一人、妹四人の七人兄弟姉妹がいた。家は田畑合わせて一町五反歩ほどの自作農家ではあったが、祖父母もいる大家族で食うのがやっとの生活だった。小学校卒業後私は上の学校へ行きたくていつもうずうずしていた。

二 志願しての軍隊生活

高等小学校卒業後、二年ほど農作業を手伝っていたがどうしても上の学校へ進学したく、また軍

国主義の時代でもあったので、十七歳から入学出来る、陸軍工科学校を受験することにした。(東京の小石川にあった)

昭和十一年(一九三六)年六月、津の連隊区司令部で、試験(身体検査と学科試験)があり、三重県で八十人ほど受験したが合格者は私と鈴鹿市の山際辰見君と津市の真弓進君の三人だった。結果がすぐ分からずやきもきしていたら、十一月下旬に陸軍工科学校長から次のような通知があった。

通知書

服部利男

右ノ者陸軍工科学校生徒採用予定者ニ決定ス仍テ昭和十一年十二月七日午前八時着校スベシ

昭和十一年十一月二十一日 陸軍工科学校 印

私は叔父の稔に付き添われ、十二月六日学校前の下宿屋のような宿に一泊し、翌七日陸軍工科学校の生徒となった。全国から集まった同期生は二百五十人、入校と同時に七つの工科に分けられた。私は入試時の願書に、第一希望として火工科と書

いておいた。その理由は、当時火薬学を教えていたのは東大の火薬科と工科学校の火工科だけで、工科学校の火工科を卒業すると、甲種火薬類取扱の免許を取得することが出来るということを先輩から耳にしていた。

二百五十人は七つの工科(火工・鞍工・銃工・鍛工・木工・機工・電工)に分けられた。教育の内容は、陸軍が戦闘のため、必要な兵器弾薬の整備補給に関することと、旧制中学校の卒業程度の普通学を教えられた。私は希望した火工科で勉強することになったが、同期生の内には旧制中学校卒業生が大勢おり、英語の成績が上がらず苦労した。在校中印象に残るような記憶はあまりないが、樺太(サハリン)出身の秋葉という同期生が就寝前、何かの理由で、手塚指導生徒(四十五人の火工科一年生に、二年生の三人が指導生徒として、起居を共にしていた)にビンタをとられ失神して倒れた。これにあわてた手塚指導生徒は廊下にあった痰壺(痰や唾をはくため水を入れた容器が廊

下に一個ずつ置いてあった)の水を頭からぶっかけて蘇生させたことがあった。在校中二年生と顔をあわせることは朝昼夕の食事時間だけだったので、あまり二年生に油を搾られるようなこともなく、すべて官給で月四円の手当をもらい、日曜日ごとに外出して神田の古本屋をのぞき神社仏閣に参拝し、井飯を食べて学校に帰るというのが私たち外出時のコースでもあった(ちなみに電車賃は東京中どこまで乗っても往復七銭、井飯一杯が十銭であった)。

各工科の専門教育の内容

火工・応用化学を学び火薬爆薬の取扱

鞆工・皮革及び麻製兵器の研究と眼鏡修理

銃工・機関銃小銃拳銃の取扱と修理

鍛工・火砲の取扱と修理

木工・道路鉄道橋梁の修理と地形測量

機工・戦車自動車飛行機の発動機の取扱

電工・有線無線の取扱と電気工学の研究

日中戦争(支那事変)拡大のため学業が六カ月

短縮され、在校一年六カ月で卒業し伍長に任官した。私の赴任先は、朝鮮軍琿春駐屯地歩兵八十七連隊(安部部隊)だった。歩兵連隊に二カ月、隣の山砲隊(九四式山砲)に四カ月勤務、兵器業務のまだはつきり分からぬままに琿春駐屯隊司令部付となり営外居住となる。伍長で営内居住のときの俸給が十三円五十銭だったのに比べ軍曹に進級し官舎を与えられ、九十五円を支給される。金の使い道も知らない二十歳の私にとっては夢のような金額であった。

着任早々の初仕事は張鼓峰事件後元のままになっていた不発弾の処理であった(註・張鼓峰事件とはソ連満州朝鮮の国境にある小さな山をソ連軍と日本軍が取り合った昭和十三年夏の国境紛争である)。短い学校生活で不発弾の処理については机上の教育と、一度模擬弾による爆破教育を受けただけなので全然自信がなかった。兵器班長の中瀬大尉は、私が学校出身で専門教育をうけているものだと思っているらしいので、今更できないと

もいえず、学校時代の教科書を調べ、兵隊二人に一キロ爆発缶を数個（黄色火薬充填）、緩熱導火策数十メートル、スコップ、雷管、マッチ等を持たせて爆破作業にむかった。国境守備隊長からあらかじめ場所の通報を受けていたので着弾地を確認（数カ所あったように思う）信管に触れないよう慎重に付近の土をのけて、爆薬缶に雷管と導火策を装着させ退避壕までの距離により導火策の長さを加減（緩熱導火策の燃焼速度は一秒一センチメートル）爆破を行ったところ、心配したような事故もなく新前軍曹の面目を保った。

琿春駐屯隊司令部勤務中、関東軍司令部の命令により満州のチチハルで行われた九八式臼砲（口径二十二センチ）の特別訓練に参加した。この臼砲には砲身というようなものはなく砲頭、弾中、弾尾と床板に別れており弾頭には信管と爆薬、弾中には爆薬だけで、弾尾は弾の方向性を安定させるために翼の形をしており、中には弾丸を飛ばす装薬（綿火薬）が充填してあった。夜間、人力で

隠密裏にそれぞれ分解した弾丸床板類を敵陣地の至近距離（六百〜千メートル）まで運び、四五度の角度をつけた壕を掘り、枕木（鉄道の枕木のよななもの）を並べ床板を固定し、前述の弾丸を装着発射演習を繰り返し返した。教育終了後担当の教官から、訓練内容は軍事機密に属するから帰隊後上官でも絶対に口外することがないよう厳命があった。

原隊帰隊後軍参謀より、教育を受けた内容説明を求められて困惑したが、関東軍司令部より訓練内容を尋ねないよう通牒が来ていた様子で、結局詳しい説明をせずやむやみになった。

この兵器の実用部隊が独立臼砲第一連隊として満州の公主嶺にできた。私は新設部隊要員として転属を覚悟していたが幸か不幸か転属はなかった。戦局悪化に伴い臼砲部隊はラバウルへ、沖繩へ、済州島へと三つに分かれて参戦したと聞いたが終戦時はどうなっていただろうか。

昭和十六年一月、新京（長春）にある関東軍野

戦兵器廠本部付となる。廠長は中村少将で兵隊はおらず将校、下士官、判任官待遇の属官と雇員のみで構成した部隊であった。仕事は在満部隊に対する兵器弾薬の整備補給と技術指導を主な任務としていた。隷下に九つの支廠（新京、ハルビン、牡丹江、琿春、東寧、孫吳、ジャムス、チチハル、ハイラル）があり、東京の兵器行政本部から来る書類は新京の野戦兵器廠本部へ、内地の各補給廠から来る兵器弾薬の現物はそれぞれ各地の支廠へ送られてきたので、私の勤務する本部では書類整理が主とした仕事であった。書類の整理だけといっても何十万という部隊が相手だけに仕事量も膨大で毎日がとても忙しかった。毎年一回だけ隊長が行う隷下支廠への随時検閲にお供して全満各地を回るのが楽しみの一つであった。ただ検閲終了後、隊長の行う講評の原稿作り（専門事項のみ）が苦勞の種であった。

昭和十七年十月、廠長に結婚するように勧められ、一カ月の有給休暇をもらい内地へ帰った。久

しぶりの帰国で、友人の家や親戚を尋ねているうちにいつしか日がたち帰隊まで一週間となってしまう。幸い近所の人の世話で小学校時代の同級生である石井勉君の妹さんの綾子を紹介され、帰隊直前に婚約し廠長との約束を果たした。昭和十八年二月十一日亀山神社で、結婚式をあげた。

私は帰郷できず写真での結婚式であったが綾子は式後すぐ渡満、部隊前の陸軍官舎で新婚生活が始まり翌年長女洋子が産まれた。

戦局が悪化した昭和二十年ハルビンで、猛毒ガス「イペリット」の野外散布演習があった。私は火薬毒ガス等の教育を受けていたので廠長の命によりこの演習に参加した。

「イペリット」という毒ガスは液状で皮膚についてもその附着箇所がただれて、気化したものを肺の中に吸い込んでも、肺に浮腫を起すという厄介な物質で、毒ガスの中でも一番扱いにくかった。

散布に当り私たちは全身防護のゴムの衣服とガスマスクをつけ、ゴム長靴をはいていたにも拘わ

らず演習が終わり風呂に入ると左足のアキレスケンの付近がかゆかった。翌日になると、左足の甲全体が腫れ上がり、大きな水泡が出来、膿がたまっていた。おそらくゴム長靴の裏に小さな穴があり、毒液が浸透したものと思われた。早速入院、軍医から治療法研究のため、一カ月ほど入院するよう告げられたが、注射器で膿を抜く、うずきも去り痛みも和らぎ歩けるようになったのと、仕事も忙しかったので二日間で退院した。

註 イペリットという毒ガスは第一次世界大戦のとき、ドイツ軍が仏領のイーブルという所で初めて使用した。その地名からイペリットと名付けられたといわれている。

三 終 戦

昭和二十年八月十五日の玉音放送は、原隊復帰のため移動中で全然知らなかった。朝鮮の羅津要塞の大口径砲を内地の海岸防備のため、移動することになったので、至急羅津へ出張するように廠長から命令をうけ、八月八日早朝新京を出発、羅

津へ向かった。九日早朝延吉でソ連軍がソ満国境を突破、侵攻を開始したとの報を聞き、直ちに新京の部隊へ戻ることにした。列車が動かず新京に着くのに二、三日かかった。新京へ着くと、私の所属部隊はすでに通化に東進（当時は退却することを東進と言っていた）。通化へ行くと部隊の大部分は北朝鮮へ転進し、残っていたのは警備隊三百人と、新京支廠に保管していた武器弾薬をソ連軍に引き渡すための要員十人のみであった。通化へ到着して初めて終戦を知ったのである。八月二十日ごろであつたらうか。北原中佐の下で副官としてソ連軍へ武器弾薬の引き渡しを完了、吉林の師導大学ソ連軍による武装解除を受ける。

ソ連当局は、捕虜とした日本軍隊を兵、下士官、将校と別々に収容し、縦のつながりをなくした上、千人単位の大隊を編成、独ソ戦で消耗した自国の労働力補充のため、六十万近い在満将兵（一部民間人を含む）を極寒の地、シベリアへ送り込んだのである。私は二一〇作業大隊第一小隊長とし

て吉林を九月八日に出發し、一カ月かかって十月八日、中央シベリアのバルナウルに到着した。吉林出發時、通訳を通じ「どこへ連れて行くのか」とたずねると「ミカド（帝）ブリカーズ（命令）

トウキョウ ダモイ（帰る）」と言う。要するに日本人捕虜は天皇陛下の命令により日本へ帰すのだという。私は信用しなかった。でももしかすると、という希望もあった。新京から南下したら日本へ、北上したらソ連へ行くのだと皆で話し合った。列車は北上しハルピン、孫呉、黒河と過ぎアムール河を渡り、ブラゴエシチエンスクに到着した。通訳を通じてソ連の輸送指揮官にいままでの嘘をただすと「今、大連の方は満州からの帰還者で混雑しているので、ウラジオストック経由で日本へ帰すのだ」という見え透いた嘘を言う。

夜中に貨車が發進した。皆一縷の望みをかけて夜の明けるのを待った。希望に反し朝日が列車の進行方向の後ろから上がった。あの有名なバイカル湖だとカンボーイ（監視兵）が教えてくれた。

吉林を出發してから丁度一カ月目に、四方に望樓の建つ捕虜収容所へ入ったのが三カ年間の抑留生活の始まりであった。

四 シベリアにて

吉林で編成された我々二一〇作業大隊は二つの収容所に分けられ、私は第五ラーゲル（捕虜収容所）に収容されることになった。収容所の内部は二段ベッドになっていて広がったが、五百人入るといっぱいになった。労働の場所はフタロイワゴンツエハー（第二貨車修理工場）であった。作業につく前に身上調査があり、技術のない者はトランスポート（野外作業）に回された。私は特別な技術はなかったが、小隊長として入ソした関係上、修理工場で働く部下と職場の連絡役を勤め、直接労働に従事しなかった。そのため、エネルギーの消耗も少なく生きるうえで最も悪条件だった入ソ一年目のシベリアの極寒をしのぎえたのである。在ソ中一番私たちを苦しめたものは、寒さでもなく労働のつらさでもなく、飢えだった。朝食は

一椀（各自が持っている飯盒の蓋）のスープ（塩味だけの少し色のついた湯の中にキャベツが少し入っていた）、昼食は高粱・粟等を油でトロトロに煮つめた粥一椀と少々のかゆ揚げのにしん、夕食は黒パン三百グラムと決まっていた。皆、空腹に耐えかねて野草のアカザ、木の芽等を工場の蒸気でふかし岩塩で味付けして食べた。入ソしてしばらくすると急に寒くなりだし栄養失調と寒さのため毎日のように死者が出るようになった。また夜間は五百人も同じ部屋で寝ているので、便所へ行く人の出入りで二重扉を開けたり閉めたりする音がギツコン、ギツコンと鳴り続け、入口近くに寝ているものは一晩中寝られず、毎日順繰りに寝場所を交替した。真冬になっても毛布一枚しかないで持っている衣類を全部体に巻いて丸くなって寝た。

最も苦しかった入ソ一年目の冬をすぎると、多少生活にもなれ、また「コルホーズ」、「ソフホーズ」等の農場の手伝いに出るとそこで手入れする

作物（キャベツ、人参、馬鈴薯が主な作物だった）だけは作業中食べるのを監視兵も黙認してくれた。帰りには監視兵の検査があったが鉄ペラで馬鈴薯を薄く切り腹に巻いて持ち帰った。

夜のパンの分配はまた大変な仕事だった。川柳に「食パンの腸（ハラワタ）を食う青い顔」と言うのがあるが、私たち青い顔をした抑留者たちは皆食パンの耳の方を望んだ。こうばしくって腹もちが良いからである。当番は一日交代で一個三キログラムのキルピーチパン（レンガの形をしていたので皆がそう呼んでいた。キルピーチとはレンガのこと）を皆の目の前で十等分する。なお一層公平を期するために当番が一人の者を後ろ向きにさせ一つのパンを指で押さえ、右回り（時には左回り）何番と質問する。情けない話であるが、これが当時シベリア抑留者たちの現実の姿であった。

ある日作業員の一人が腹痛を訴えてきた。事務所へ行き、係りの女事務員に、片言のロシア語で病気の様子を説明し休業を求めたが、「ヤーニズ

ナイ」（私は知らない）を繰り返すばかり。癩しかに障った私は、小声で「わからずやのオタンコナス」とつぶやくと女事務員（青い目の別嬪さん）の顔色が変わり「イジスターペロボーチク」（通訳を呼んで来い）と怒り出した。何で怒るのか訳が分からぬまま、通訳を捜し出し、女事務員との交渉の経過を説明し善処を頼んだ。ソ連ではちょっとしたことでも重労働十年から十五年の刑が科せられると聞いていたのでひやひやしながら通訳を連れて行くと、通訳の説明で女事務員の態度が変わり腹痛の作業員の休業を認めてくれた。後で通訳に話を聞くと、作業員は腹痛のため到底作業に耐えられないことと、貴女は大変情けが深く美しい方だと思ふとあのヤポンスキーオフチェール（日本人将校）が言ったのだと説明してくれた。私の言った「ワカラズヤノオタンコナス」という意味の無い短い日本語を長い長いロシア語に翻訳してくれた通訳に感謝すると共に、女事務員の怒り出した原因が分からず通訳に説明を求めると、ソ連

では相手を罵る時一番嫌悪感を抱くのは、イビトワヤマーチと言う言葉でよほどのことがないと通常使用しないロシア語で、その意味は「お前の母親を姦するぞ」と言われたと誤解したのではないかとの話だった。

丸一カ月を過ぎると、どういう基準で選定したのか分からないが、兵下士官の半分以上帰国し、他の収容所から何百人もの抑留者が第五ラーゲルに入所して来た。其の中に相当大勢のアクチーフ（共産主義教育を受けた民主主義者）がいた。何人ぐらいいたか記憶にないが、早速収容所内に壁新聞を張り、またハバロフスクで発行されている日本新聞を数人に一枚あて配ると共に、ソ連政治部将校の指導で旧軍組織のままだった作業大隊を解体し、一般兵の中から大隊長を選んだ。今までの大隊長（少佐）、中隊長（中尉）、小隊長（少尉）の将校たちは一般兵と同様毎日作業に出ることとなった。途中民主大隊長は交替することはあつたが私の帰るまで将校たちが旧に復することはなか

った。

いつごろのことだったか記憶が定かではないが、ある日突然工場内に全員が集められた。貨車工場内の鋳物工場で働いていた兵隊が手先の器用なのを利用、使っているアルミニウムの線を盗んでとかし、いろいろな柄のスプーンを作りロシア人の工員に売り、パンを購入して食べた事に対する人民裁判開廷のためだった。裁判長、検事、判事、弁護士等々いたが、どういう形式で判決が下ったか一切覚えていないが、国家反逆罪で、二十五年の判決が出され、すぐどこかへ連れて行かれた。

ハバロフスクから来た共産主義の教育を受けた自称民主主義指導者の共産主義教育が始まった。一部の者だけだったのか、全員に対してのものであったのか記憶にない。共産主義者にならないと帰国できないという噂がとんだ。皆昼間の労働で体がとても疲れていて居眠りしながらソ連共産党の歴史とか、マルクス、エンゲルスの理論とか、私たちには理解しにくい難しいことからはじめられ

たのである。特に私の記憶に残っていることは人類の社会制度の変遷について次のような説明がなされた。

人類の社会制度は、原始共同体―奴隷制度―封建制度―資本主義制度―社会主義制度―共産主義制度と進化し究極の社会形態は共産主義制度であると説明した。始めは居眠りしながら聞いていたが、何度も何度も同じ事を繰り返し聞かされると、三人市虎を成すのとえ（嘘であっても大勢の人が言えればついには真実だと信じられてしまうこと）でこれからはそうなるのかなと思うようになった。原始共同体から共産主義への流れは大河の流れに似て、どんなことをしても堰き止めることはできないと説明、現在のソ連は一応社会主義が完成した程度で、後七十年ぐらいたつと理想の共産主義国家ができるのだろうと結んだ。

アクチーフの説明によると社会主義とは各人は其の能力に応じて労働する社会形態で、それぞれ各自の能力に応じて仕事が与えられ、その仕事の

評価によって報酬が与えられるのである。また共産主義国家になると搾取するものがないから、あらゆる物資が、地上に満ち溢れてくるので人々が希望する物資が好きなだけ手に入るようになるとのこと。

「なんだか狐に化かされたような気になってきたとき誰かが「資本主義と社会主義とはあまりちがいが無いのでは」と質問するとアクチーフは「資本主義国家には資本家や地主がいて人民から搾取するが、社会主義国家には搾取者がいないのだ」と、また別の一人が自由主義国家では共産主義を始め資本主義思想、信教の自由等すべて自由であるのに共産主義国家では一国一主義で、自由がないのでは……」と尋ねるとアクチーフは「人民は赤子のようなものです。皆さんは自分の子供が毒なものを口に入れようとしたときどうしますか、それは毒だから食べてはいけなと止めるでしょう。それと同じことで人民が悪い物を口にしようとしたとき、それを止めさせるのが本当の親心な

んです」と何とも苦しい言い訳である。

五 復 員

(一) ダワイ ダワイで一年過ぎた

スコーラ スコーラで二年も過ぎた

民主 民主で三年目だが

いつになったら ダモイやら

(二) 捕虜は捕虜でも 三年目となれば

ラポートするのも鼻歌まじり

粹な娘にウインクすれば

にっこりえくぼの愛らしさ

(三) 汽車は出てゆく 煙をはいて

いつか俺らもあれに乗り

一路祖国へ驀進するぞ

日本建設この腕で

(ダワイはやく スコーラもうじき

ダモイ帰国 ラポート労働)

昭和二十三年初夏の夕方、野外作業からの帰り

道トラックの上で誰が作ったか分からない戯歌を

軍歌代りに歌いながら収容所へ着いて見ると驚天

動地の朗報が私達を待っていた。

捕虜收容所長は私たちに日本への帰国が決定したことを告げた。過去何度もスコーラーダモイ（もうすぐ帰れる）といわれて来ただけに、始めは半信半疑だったが今度は本当だった。入ソする時は吉林から丸一カ月もかかったが、帰国する時はバルナウルから四、五日だったと思う。

乗船地ナホトカ港に到着すると、民主主義（共產主義）教育のため、第一、第四のラーゲルを次々に回され、アクチーフの扇動により米軍支配の天皇島上陸への心構えとしてのアジ演説とシベリアの収容所時代、反動と目されていた人達の吊るし上げがあった。私は嫌悪感を抱きながらも、ナホトカまで来て反動と見なされ、奥地へ逆送されてはたまらないと目立たないよう小さくなっていた。全員思いは同じだったと思う。

七月二十三日、興安丸で舞鶴に上陸し、やっと故国の土を踏んだ。検疫や各種調査で二日ほどばかり、引揚手当三千円をもらって京都經由亀山へ

向かう。電報を打っていたので京都駅まで父と義父が迎えに来てくれていた。

そして妻の死を知った。

抑留生活一カ年余りが過ぎたころ一回だけ捕虜通信（往復ハガキ式になっていた）が許され、その返信ハガキにより妻が昭和二十一年十月、無事内地に帰ったことは知っていたが、其の文中に、「私は無事元気で帰国した」と書いてあったが、「私たち」とは書かず、「私は」と書いてあったので「洋子」（娘）は引揚中死んだものと諦めていたがまさか妻までもがと頭の中が真っ白になった。

三カ年のシベリア抑留中、捕虜通信が許されたが、文言はすべて片仮名で書くよう求められた。私はハガキの末尾に左記のような言葉を書き送ったが亡妻や親たちには意味がわからなかったそうである。

蓮葉（はちすは）の 濁りに染まぬ 心もて
いとし妻子に 会わんとぞ思う

私としては思想的な影響は受けず、昔のままの心で帰りたいとの意を亡妻に伝えたかったのだが！

終戦時、妊娠三カ月という体で満州の新京（長春）で私の別れた妻は、北朝鮮の宜川という町で昭和二十一年二月、私の長男を出産した。生れた子に夫の面影を見たのであるうか。利男と名づけた。一カ月後、長男は栄養失調のため死亡した。戸籍に入れられないまま鬼籍に入ったのである。私の長男利男は昭和二十一年十月一日、小さな遺骨と死亡診断書と共に、父母の生まれた地、亀山へ帰ってきた。

七 シベリア抑留についての一考察

昭和二十年八月九日、日ソ中立条約を一方的に破り、ソ満国境からソ連軍はいつせいに攻撃をしかけた。当時の関東軍は、強力師団をほとんど多方面に転用、ソ連侵攻時骨格兵力は、一般師団六個と国境守備隊十五、それに一戦車師団のみであった。ただ在満居留民の根こそぎ動員により、新

設部隊を作り、昭和二十年七月末、主要部隊の人員はおおむね充足したが、装備の整わない部隊が多く、その戦力も弱かった。兵器弾薬類も少なく到底ソ連軍の敵ではなかった。そして六十万近い関東軍将兵と民間人が捕虜としてシベリアに抑留され、一年十一年の重労働に従事させられた。

ポツダム宣言第九項に「日本国軍隊は、完全に武装解除せられた後、各自の家庭に復帰し、平和的且つ生産的の生活を営むの機会を得しむらるべし」とある。シベリアの捕虜収容所が、各自の家庭である筈がない。なによりも停戦協定によって武装解除された将兵たちが、はたして捕虜に該当するか、法的問題もある。国際法には捕虜はあくまでも戦時捕虜であり、明治四十年に制定されたハーグ条約に照らしてもそうである。ソ連軍が満州侵攻時、戦闘により捕虜となった将兵は終戦時シベリアへ強制移動させられた六十万将兵のごく一部である。

約六十万の将兵を法的根拠のないままで一十

年の長きにわたり強制労働させ、六万近い犠牲者を出させたソ連に対して一件も補償請求されたことを聞かない。帰国時一切の書き物の持ち出しを認めなかったためなのか、在ソ中のアクチーフによる洗脳の結果か、未だに理解に苦しむ次第である。従軍慰安婦問題、中国南京の虐殺問題は未だに国際問題化するのに、六万近い犠牲者をだしたシベリア抑留者の問題については一度も国際問題化しないのは不思議でならない。

多くの犠牲者を出し占領したにもかかわらず、米国は沖繩を日本へ返してくれた。ソ連は一方的に条約を破り進駐した日本固有の領土、齒舞・色丹・国後・択捉の四島を言を左右して返してくれない。ソ連という国に強いいかりを覚えるのは私だけだろうか！

私の青春回顧

滋賀県 山口 馨

おいたち

大正十四（一九二五）年九月六日、農家の二男として生まれる。湖国の北に雄大にそびえる伊吹山を眺めながら幼少期を過ごした。ちょうどそのころ、郷土の出身で民間航空機のパイロットをされていた松井さんが東南アジアだったと思うが、親善飛行の機長をし、見事使命を果されて、全国的に有名になられたのを子供ながら大変誇りに思い、自らも飛行機に憧れた。

小学校を卒業すると、開校されたばかりの各務原陸軍航空技能者養成所を受験、入所した。以後三カ年の教育を受けて卒業したが、そのころ、太平洋戦争の最中であり、大阪の大和川沿に建造された大阪陸軍航空廠へ配属になって二年間勤務する。